

多文化共生社会における外国籍幼児の支援に関する実践的 研究

—コミュニケーションの広がりを目指した保育の構築—

堀 奈美 松本 信吾 七木田 敦 清水 寿代
河口 麻希 菅村 亨 中邑 恵子 小鴨 治鈴
(研究協力者) 王 心慧

I. 問題と目的

広島市では外国人留学生が多く、その中には子どもを帯同して来日するケースがある。外国籍の子どもは、小学校以上であれば、少人数教室や日本語教室で学校生活に必要な日本語を学ぶことができ、また加配教員等の配置など支援体制が充実している。一方で幼稚園や保育所に入園してくる幼児の場合、年齢的にも母語しか話せないことがほとんどである。またその支援体制も各園に任されており、保育者が日々対応を摸索しているという現状がある。菅田(2006a)は、外国籍幼児を受け入れた幼稚園・保育所で起こりうる課題として①集団活動において外国籍幼児を位置づけたカリキュラム作りと保育実践の難しさ、②言語の違いによる外国籍幼児とのコミュニケーションの難しさ、③外国籍幼児の持つ文化を尊重しながら、日本人幼児とのかかわるきっかけ作りやそのための支援の必要性の3点を見出している。

本園でも、スーパーグローバル大学である広島大学の附属園として、外国籍の子どもの受け入れを行っている。グローバル社会形成の観点から、幼児期に身近な環境として多文化を経験することは有効であると考え。外国籍幼児の中には、園生活を通して日本語を吸収し生活に慣れていく子どももいれば、園生活に慣れるまでに時間を要する子どももいる。また、特に年齢が上がるにつれて、日本人幼児とのかかわりの中で、言語でのやりとりが必要となるケースが増えてくる。そのため、周りの子どもたちと

のコミュニケーションを取りにくい外国籍幼児にとっては、園生活を送る上で友だちと意思疎通がうまくいかないなど様々な困難が生じることがある。

今後、地域においてもますます外国籍幼児の保育が課題になると思われるが、グローバル社会形成の観点から、その解決に向けては日本の文化に適応しながら、母国の文化も維持するという視点が必要になろう。そのため本研究では、先述した菅田があげた課題の③に着目する。本研究の目的は、外国籍幼児が日本の文化を習得することだけでなく、その文化的背景をもふまえた支援をすることで子どもらしさを発揮し、周りの子どもたちと密接なコミュニケーションをとることが可能になると考え、そのための具体的な支援の方法を明らかにすることである。

II. 方法

1. 方法

本研究では、外国籍幼児がどのようにして他者とのコミュニケーションをとっていくのか、以下の手順で検討をした。前年度3歳児クラスに入園したA児を対象児とし、(1)園生活の中で周りの友だちとどのようにかかわっていくのか、その様子を経過観察していく。また、(2)他の幼児にも、A児と関わることによって自分の文化と違う文化があることに気づく契機とする。指導と評価にあたっては、外部機関との保育カンファレンスやコンサルテーションを踏まえて、多文化共生のための支援方法を考えてい

く。

本研究では、中国籍の男児A児が幼稚園に入園することで、どのような出来事が生じ、そして幼稚園の保育者がどのように対処するのかという過程を分析するため、保育者がエピソードを収集すると共に、研究協力者が対象の集団の中に直接入り込む自然観察を行った。その中で、気になっている部分についてエピソードを作成し、分析を行った。また、幼稚園保育者のあり方、外国籍の幼児への接し方等、研究テーマに関する文献を集め、保育者の外国籍の幼児への具体的な支援方法について検討した。

2. 対象

2-1 研究対象の概要

研究対象としたのは、H幼稚園の中国人の男児A児である。201X年現在4歳である。A児は201X年2月に中国の山東省に生まれた。来日前には幼稚園などでの集団生活の経験がなかった。201X年4月に日本でH幼稚園の3歳児クラスに入園した。両親は共に中国人の留学生で、来日直後に両親がA児に日本語会話を少し教えたものの、日常の家庭における使用言語は中国語のみであった。

A児の言語使用状況については、入園当初、園生活においてA児から積極的に日本語を話すことはほとんどなかった。A児の母親によると、A児が中国語を喋るようになったのは他の子どもより遅く、概ね2歳になった頃であったと話していた。また、A児の出身地は中国の山東省で、A児は故郷の方言だけが話せるようで、中国語の標準語は難しかった。

父親は日本語での会話が可能であったが、園に持ってくる持ち物など、園生活において必要となってくる事柄や、保育の細かな内容になると意味や意図が通じないことが多かった。母親は来日当初簡単な日常会話は可能だが、それ以上の会話になると理解が難しく、父親を頼る姿が見られていた。そのため、保育者との会話は主に父親に通訳してもらったり、具体的な物を見せたりしながら行うことが多かったが、父親同様に意味や意図が通じにくいことが多かった。また、日本と中国における子育てに関する意識の違いもあるのか、A児は自国では自分の身の回りのことを自分で行う経験がほとんどなかった。そのために靴や衣服などの着脱等、自分のことを自分の力で行うという意識をもっていない状態であった。他にも、家庭ではパソコンや

タブレットなどでアニメを見たり、ゲームをしたりして過ごすことが多かったようで、同年代の子ども達と接したり遊んだりする経験がほとんどない状態で入園した。

2-2 支援体制

入園した幼稚園の支援体制としては、担任・副担任を中心にA児が集団生活に慣れるように援助していきながら、フリーの保育者も出来る限りA児のサポートを行う体制であった。

III. 結果と考察

1. 年少児クラスでの様子とエピソード

前年度の年少児クラスにおける保育実践では、A児が新しい環境でまずは保育者との信頼関係を築くことに重点を置くことにした。その中でいくつかの課題が見つかっただけでなく、A児と言葉を介してのコミュニケーションが取りにくいこと、さらに両親への細やかな支援が必要であることから支援体制の見直しが行われた。特別支援コーディネーターが大学側と連携を図り、大学教員だけでなく中国籍の研究協力者である大学院生とA児の行動観察を行うこととした。さらに研究協力者が両親の困っていることを細やかに聞き取り、定期的なカンファレンスの場で共通認識し、それを元に担任・副担任が支援を行うようにした。また、大学院生を通して、保育者の意図を両親に伝えてもらったりしながら、A児の育ちを支えていけるようにした。

①保育者との関係について

エピソード1-1 201X年5月7日

入園して数日が過ぎたが、A児は緊張した表情で過ごしており、保育者が話しかけても目を合わせたり、自分から何か訴えたりすることがなかった。また、トイレに誘っても行こうとせず、失敗することもあった。しかしこの日、初めて自分から保育者に「尿尿」と訴えてきた。そこで担任と一緒にトイレに行ったところ、トイレでの排泄に成功した。

言葉も分からない国での生活が始まり、何もかも分からない環境の中で、ずっと硬い表情をして黙っていたA児だが、この成功体験から、トイレにいきたくなったら「尿尿」と言いきたり、担任がトイレに行くかどうか尋ねた時に、頷いたり、首を振ったりして保育者に意志を表そうとするようになった。また登園時に不安から涙が出ても、抱っこなどの身体を使った直接

的な触れ合いを求めるようになってだけでなく、5月下旬には担任や副担任の名前を覚え自分から呼びかけるなど、保育者を頼ることが多くなった。また、「いただきます」「ちょうだい」といった食に関する言葉を保育者の真似をして繰り返すようになった。また「おはよう」「バイバイ」といった簡単な挨拶も、保育者の真似をするなど、いくつかの単語は話すようになった。しかし、自分の思い通りにならなかったり、自分の表したいことをうまく表現できないもどかしさからか、A児は何かを伝えようとする時に保育者や友達を叩いたり、怒ってその場から離れたりするといった行動が見られるようになった。その行動に対して保育者が「だめ」と制止することが増えていった。また遊びが終わりの時に、保育者が「おしまい」と伝えて次の活動が始まることを伝えていたが、遊びを中断された気持ちになるのか、A児も「だめ」「おしまい」「ノー」といったような拒否の言葉を発することが多くなった。何か言いたいことがあるという気持ちの受け止めは保育者が意識して行っていたが、言葉での細かな伝え合いが難しいことが続いていた。A児は11月頃より両親とは、送り迎えの際に中国語で話したり、かなり長い文章を言ったりするようにはなったが、保育者や友達に対しては言葉を用いるよりも、叩くなどの行動で表すことの方が多かった。

②他児とのかかわりについて

エピソード1-2 201X年5月7日

A児が椅子に座っていると、男児Bと男児Cが近づいた。B児はA児の頭を叩いて、「ね、ね」と言った。A児は何も言わずに椅子から離れて、テーブルの反対側の椅子に移動した。そしてB児は先にA児が座っていたところに座った。

反対側の椅子に座ったA児は、テーブルの上に置いている色紙を使ってもいいと思い、色紙に触った。しかし、この色紙はB児とC児が持っているものだったため、A児の行動に気付いたB児は取られたと思って急に怒った。「だめだよ。これ、俺のものだよ」と言いながら、もう一度A児の頭を叩いた。A児は叩かれたことに驚き、走ってその場を離れた。その時、フリーの保育者が来てこの状況を制止した。フリーの保育者はまず、B児に「怒るのはだめ。優しくしてね。」と言った。そして、色紙が置いてあるケースを取ってA児に渡し、「この中のをとった

らいいよ。」とA児に言った。

クラスの子ども達には、担任からA児が中国の子どもで、まったく日本の言葉が分からないことを伝えていた。だが、実際に母語が違うと言葉が通じないという実感はなく、A児に対しても他の子ども達と同じように話しかけたり、接しようとしたりする姿が、エピソード1-2のように見られていた。一方A児は入園当初、他の子ども達が近くに来ると他の場所に移り、距離を取って様子を見ていることが多かった。接しようとした子ども達も、A児から何も反応が返ってこないこともあれば、逆に思いもよらなかった反応（叩く、物を投げる、噛むなど）で返ってくることもあるということに気が付いた。またA児は4月半ばから6月くらいまで、保育室にあるままごとなどのおもちゃを棚からひっくり返したり、窓の外に投げたりしていた。さらにクラスの集いで、床に寝転んだり、ままごとコーナーに行ったり、保育者が絵本を読んでいると、間に割り込んだりすることが多かった。これらの行動から、A児を保育者がたしなめる機会も増え、そのことからかA児のことをいけないことをする子どもという風に感じた子どももあり、距離を取る姿も見られるようになった。しかし、保育者は言葉が分からなくてA児も困っていることを繰り返し伝えていくようにした。それから、A児の取った行動に対して、どうしたらいいのか分からない子どももいたが、A児も困っているということが伝わったからか、A児が分かるようにゆっくり話そうとする子どもも見られるようになった。

エピソード1-3 201X年10月6日

室内の遊びから戸外に出ようと、他の子どもは次々にトイレへ行き、順番待ちの列ができていた。担任は「A、尿尿は？」と声をかけた。するとA児は自分でトイレに向かうだけでなく、その列の一番後ろに並んだ。その時、一緒にトイレへ行った男児はA児の行動を見て、「Aが順番できるようになった！」と大きな声で言った。

このエピソードからは、他児がA児の行動をよく見ていたことが分かる。いつも間に入ったり、順番を抜かしたりといった行動が見られていたA児が、この時は抜かさずに待っておくという行動が取れたことに気付き、驚きの言葉になって表れた。しかし、考えてみると、いつも

並ぶことができないという先入観をもってA児を見ていたのは保育者の方かもしれない。他の子どもたちは、A児のことを自然な形で受け入れており、A児の行動のそのままを評価して言葉にただけのようにも思われた。そしてこのように、A児が順番が守れたことは、他児から見てA児に対する肯定的な変化を与え、A児と他児の関わりに対してもポジティブな影響を与えたと思われる。

③基本的生活習慣と両親への支援

朝、登園してからのルーティンワーク（シール張りやタオル掛け等の身支度）は、最初のうちは保育者が方法を見せ、一緒に行っていた。A児は機嫌が良ければ真似をするが、そうでない時は自分から行うことがまったくなく、保育者が他児に関っていると、鞆などもそのまま置いていることが多かった。お弁当の準備は自分で行き、箸を使って食事をするが、お弁当の片付けになるとやろうとしないだけでなく、嫌がって投げ出したり寝転んだりすることが多かった。また、就寝時間がまちまちで、朝起きられず登園が遅くなったり朝食を食べないままに登園したりすることが頻繁にあった。このことから両親に対して生活上のアドバイスも必要であることが分かったので、保育終了後に生活面での具体的なアドバイスを行うようにした。しかし母親は慣れない日本での生活や風習の違い、園生活や子育ての不安等で、心理的に負担が大きくなっていったようである。大学が夏休みに入ると、母親はA児を連れて一時帰国した。帰国後、母親は気分転換ができ、10月に日本に戻った時には夏休み前より気持ちは落ち着いていた。しかし、10月に入り母親が修士課程に入学したことで、育児と学業の両方をこなさねばならないことから、A児の母方の祖母も来日することとなった。しかし祖母も慣れない日本での生活を通して、A児の母親との関係が悪化してしまった。翌年の3月まで日本にいるつもりであった祖母は10月下旬には中国に帰国し、母親のストレスが再び大きくなった。母親と担任とのやりとりの中だけでは、このような母親の細かな悩みを言葉にして聞くことが難しかった。そこで、大学院生が両親、特に母親から困っていることを聞き、そのことについて担任、副担任とカンファレンスを行うこととした。1-4はその内容である。

カンファレンス1-4 201X年10月26日

両親の悩み：幼稚園に入園して半年経ったが、日本語があまり話せないのも、とても心配している。

- ・幼稚園で少し日本語が出てきているのでA児なりの成長が見られていること。
- ・日本語で教えるだけでなく、周りの子の動作を見せたりして言葉でない方法でも伝えたりしていること。またその方法で伝わっていることもあること。
- ・言葉の課題だけでなく、A児がこれまで手伝ってもらったことが当たり前の中で育ってきたので、園生活の中で保育者にやってもらおうとするのは当たり前のことである。けれども、園生活を送る上で自分のことを自分で行う態度は必要なので、自分で行おうとする意欲を高めようとしていること。

保育者側からは、A児が家庭でどのように生活しているのかを聞き取り、生活リズムが安定することが幼児期に大切であること、A児が両親に手伝いを求めても本人に任せて様子を見たり、すぐには手を出さず、言葉で励ましたりしてほしかったことを挙げた。しかし、保育者側からの要望が多すぎると、母親の不安を増長するおそれがあったことから、A児の成長をしっかりと伝えていき、そのことで母親自身が落ちついていけるようにすることに重きを置くことを共通認識した。

母親はその後も子育てに悩みながらも、意識が大きく変容し、できるだけA児に自分のことを自分でさせようとする姿勢が見られるようになった。また、中国に一時帰国し、何日間か祖父(父親の父)の家で過ごした際に「甘やかされて、A児の要求を何でも満たす」(母談)生活であったことに対し、「せっかく日本でできるようになったのに、たった何日の間でも、好きなことばかりしていて、日本に戻ったら私が大変になる」と話すなど、幼稚園生活の中でA児の自立心や基本的な生活習慣が身に着くことを感じ、幼稚園への信頼感も増した様子であった。

2. 年中児クラスでの様子とエピソード

年中組に進級したA児は、新しい保育室、新しい担任と副担任、そして年少組から進級した友達に加え新たに10名の新入園児が同じクラスに加わった。そのような新たな環境によるA児の戸惑いも見られたので、引き続き幼稚園全体

でA児をサポートする体制が取られた。カンファレンスは、前年度から継続して幼稚園の保育者、大学教員・院生によって行った。カンファレンスに際しては、前年度同様に幼稚園側は実践の中で得られたA児に関する保育記録、大学側は事前観察による資料を提示し、カンファレンスの資料とした。それらをもとに、年少児クラスの際に見出された課題や年中児クラスに進級し、新たな友達と接する中で課題となるであろう「言葉を用いてのかかわり」に関して、カンファレンスや保育実践を介して考察するとともに、今後のA児の支援方法を探っていくこととした。また、両親に対する支援も同様に行うこととした。なお、カンファレンスには年中児クラスの担任・副担任だけでなく、他クラスの担任・副担任・副園長・養護教諭など可能な限り全教諭が参加し、多角的な視点での検討が加えられるように所見の交換を行った。

なお、本年度のカンファレンス開催日程は5月17日、6月28日、9月29日、11月9日、12月15日、2月9日の計六回であった。ここでは、カンファレンスの概要を述べることで、A児の変容や援助の内容を示す。

①第一回カンファレンス概要（5月17日）

年中児クラスに進級し、クラスの場所や担任が変わったり、新入児が十名仲間に入ったりしたことで、周りに対して頑なになっている姿が見られた。数日すると、新たな担任に自分がかかわろうとする様子も見られるが、身の回りのことに関しては自分から行くことを嫌がり、反抗する姿も見られていた。新しいクラスでの集いの場では、前年度のように座らないことも度々見られていたが、担任がしていることに興味をもって、かかわりをもとうとしたり、遊びのキーワードとなる言葉を自分なりに言おうとしたりしている姿が報告された。その姿がエピソードと2-1と2-2である。

エピソード 2-1 201X年4月

4月下旬。集いで手遊び「グーチョキパー」をしている時に、担任のところにきて「チョキ」と言って訴えるようになった。

エピソード 2-2 201X年5月

5月中旬。集いで誰が発言するのか、くじのようなことで決めているが、この日初めてA児が当たった。当たった子どもは「グーチョキパー」「落ちた落ちた」などのゲームを選んで

いた。A児は日本語で「落ちた落ちた」とゲームを選択して、クラスの子ども達に向かって「お～ちたおちた」と言った。そして、クラスの子どもが「なーにが落ちた」と合いの手を入れると、担任の援助もあり「げんこつ」と言って、手でげんこつを作って、友達の頭を優しくたたき真似をして椅子の周りを一周した。担任の頭を叩く真似の際、嬉しそうな表情で行うが、それが終わると、もう他の友達に順番が回ってしまうことが分かっていたのか、自分が座っていた椅子には戻らずにそのままサークルの中央に寝転がった。担任が止めると、ままごとコーナーに移動した。

エピソード2-1に見られたように、担任が「チョキ」の時に、一人一人の子ども達と身振りでスキンシップをもっていったことが、A児も他児と同様に楽しいと感じていたことが分かる。自分もくすぐられることへの期待感が、「チョキ」という言葉で表出されたのだと思われる。

エピソード2-2では、集いの中でくじに当たると遊びを選べるだけでなく、それらの遊びには、決まったやりとりがあることを理解していた様子が報告されている。集いの場面では、期待をもって参加したり、そこで必要な言葉を用いようとしたりするようになったことも報告されている。

また日常生活の中で、「やって」「ありがとう」等を模倣して日本語で伝えることができるようになってきた。この頃から、家庭でも「いただきます」「やって」等の日本語が出るようになっており、家庭での日本語を話す機会が増えたことが分かった。また、観察の中での報告には、ペットボトルを転がして遊んでいる友達を見てA児も一緒に「コロコロ～」といいながら転がして遊んでいたことから、生活全般の中で言語の模倣が頻繁に見られるようになったことが分かった。

両親からの聞き取りの中には、家庭で母親がしつけの仕方が分からないと困っていることが報告された。これは、前年度も見られており、父親が手伝ってしまうことで、家庭では自分からはやろうとしないこと、そのために両親の中で子育てについての考え方が異なり、しばしば意見の食い違いが起きることが報告された。今後も子育てについて相談できる環境ができるように様子を見る。また、幼稚園でA児が褒められるような機会を作り、その様子を保護者に伝

えていく方向性が確認された。

②第二回カンファレンス概要（6月28日）

集いでは「ピヨピヨちゃん」等の遊びを自分から進んでやろうとし、自分が当てられることを喜んでいる。集い中は、周りの友達への関心が高まっている。ただ、目の前でしていることは理解できているが、細かい内容等は理解できていない様子であることが報告された。

年少児クラスの時外遊びで裸足になることを嫌がっていたが、最近では裸足で外に出るようになってきた。水遊びも喜ぶようになってきたが、その中で友達と関わることは少なかった。

エピソード2-3 201X年6月2日

昼食を食べる時間となった。みんなは椅子を持って、好きなところに座ったが入り口のところで立ったままだった。そのことに気が付いた副担任は「誰かAと一緒に座ってくれる人がいるかなあ」と尋ねた。ある男児が「僕の横でいいよ」と言った。副担任は「いいなあ、じゃあAに言ってあげてね」と男児に言った。すると、男児は入りたくないような表情をしているA児のところに行き、「一緒に食べよう」と言った。すると、A児も男児のところへ行っただけで、A児は男児のところへ行った。担任はこの様子を見て、「お友達、イエーイ」とA児に声をかけた。

A児は他児と言葉でのコミュニケーションが取れずに、一人であることもあった。A児は年少児クラスから観察で訪れている大学院生に対して、中国語で「僕、ここにいるのがとても退屈です」と言ったことが記録されているように、4歳児クラスへ進級後、人間関係の問題は以前より顕著に表れるようになってきたことが伺える。そこで保育者は、エピソード2-3にあるように、A児の気持ちを察した上で、同じクラスの友達と関わることでできるきっかけ作りを意識し、実践していった。それは、一緒に座ったり、食事をしたりすることで、A児が友達の仲間に入ろうという意識が出てくるのではないかと考えたからである。また保育者は他児からA児に関わるきっかけを作ることで、A児に他児が好意を持っていることを意識させ、A児は「自分が一人ではなく、周りには友達がたくさんいる」「自分もこのクラスの仲間である」ということを実感できるように関わっていった。カンファレンスでは、このような関わりを今後も

意識的に行っていくと共に、友達とかかわりをもつために必要な言葉（「遊ぼう」「入れて」等）について支援していくとよいのではないかという意見が出された。

③第三回カンファレンス概要（9月29日）

長期休み明けも、不安になることがなく落ち着いている様子が報告された。さらに保育者が何か話しかけたことに対して、頷きだけでなく「OK」や「NO」といった言葉で応答する姿が見られるようになった。また、自分ができたことは見てほしいという気持ちからか、友達との比較をするようになり、周りの人ができていないこと（上靴を履いていなかったり、帽子をかぶっていなかったり）を、身振りも交えながら主張する姿が見られるようになってきた。主張することが多くなってきたことで、この頃より友達とのいざこざが頻繁に見られるようになった。

エピソード2-4 201X年9月下旬

A児は滑り台の下に、シャベルで砂場の砂を運び、一人でそれを固めていた。だんだんと砂山が大きくなってきたことを喜んでいるようだった。そこに、一人の男児が上から滑り台を滑ってきたために、固めていた砂山が壊れてしまった。A児は砂山が壊されたことを怒って、その友達をシャベルで叩いた。

その男児は、A児がなぜ怒ったのかが伝わらずに、逆にシャベルで叩かれたことを怒って、叩き返してきた。その後A児は怒りながら別の場所に行ってしまったので、保育者は仲介しようとしたが、しばらくの間そっぽを向いて、話し合いには応じなかった。

エピソード2-4のように、砂山を高くしようと自分なりにめあてをもって遊んでいたA児だが、周りにいた友達にはそのことが伝わっていなかった。日本人の子ども同士でもよく見られるいざこざの理由であるが、言葉が通じる子ども同士でも、相手の思いに気付いたり、受け入れられずするまでには、たくさんの感情体験が必要になってくる。また、時には保育者が仲介に入ることで、自分の言いたかったことを代弁してもらったり、相手に伝えられるように支えてもらったりしている。A児は、このようないざこざ場面で仲介に入ろうとしても、保育者の話していることが分からずに、結果としてその場から離れてしまうことが多いのではないかという気づきがあった。そこでこのようにA児が嫌

な気持ちになる場面で、保育者が「やめて」と言って見せるようにして、必要な場面で使えるようになるための支援が必要ではないかという意見が出された。

また観察の中では、以前は転んだりすると泣いて保育者に助けを求めていたが、最近では自分で起き上がって砂を落とし、また遊び始めるというように、少しのことは自分でどうにかしようとするが増えたことが報告され、A児なりに自立してきていること、そのような場面では、気がついた保育者がしっかりと認めていくことが共通認識された。

家庭との連携のなかでは、友だちの話を家庭でもするようになってきたことが報告された。心配なことだけではなく、A児の育ちを言葉にして表す様子が報告されている。また、この頃から家庭では週一回英語・日本語・絵画等の習い事に通うようになったとの報告があった。日本語の勉強では数字やひらがなを教えてもらうようで、最近では日本語・英語・中国語で数字を言うことを楽しんでいるという報告から、A児がそれぞれの言葉と意味を対応させている姿が感じ取られた。そのため、保育者が中国語を調べて単語だけでも伝えることを行うこととした。

④ 第四回カンファレンス概要（11月9日）

運動会の頃から日本語を使っただけのコミュニケーションが増えてきたとの報告があった。友達の言ったことを真似しようとしたり、集団遊びで使う言葉を言ったりできるだけでなく、日本語を覚えて友達と繋がろうとしている様子が観察された。また、単語だけを言うのではなく、「～せんせい、やって！」のように組み合わせで使うが増えたことが報告された。そこで、A児が話しかけてきた際には、言いたいことをしっかりと聞く姿勢を保育者が持ち、言葉で伝えようとする姿勢を大切に受け止めるようにした。

この頃、A児が地図を描いたことで、他児がその地図に興味を示し、他児から話しかけるなどの関りが増えてきた。A児が「マップ」という英語で説明すると、その意味が他児にも通じて、数人で地図を見ながら山際を探検するという、共通のイメージを有する遊びが生まれた。そのため、友達と遊ぶことの楽しさを感じており、友達と一緒にいることを喜んでいることが報告された。遊びの際だけでなく、集いで簡単な話し合いをする時にも輪の中に入り参加して

いるが、言葉による説明が続くと理解が難しくなって、興味が持続しにくい様子は変わらずに見られていた。

本人が納得できないことは、なかなか受け入れにくい傾向は年中児になってからも変わらず見られていたが、大声を出したり、近くにあるものを投げたりする頻度は減ってきた。また、職員室に行き、養護教諭や事務職員に関わってもらいながら、気持ちを立て直していく姿も見られるようになった。

エピソード2-5 201X年10月18日

登園時、A児は父親より早く歩いて、父親の前に幼稚園に入って、大きな声で園長、警備員、他の保護者に「おはよう」と自分から挨拶した。そして、A児の挨拶を聞いた男児3名が、「おはよう、A」と話しかけると、A児も大きな声で「おはよう」と返事した。

A児の父親はこの行動を以下のように説明した。

父親：Aの母はずっとAに「礼儀正しい子になりなさい」と言ったからかもしれない。今日Aは突然、私に「私は礼儀正しい子になりたい」と言った。そして、Aは「おはようと言ったら、礼儀正しいですか？」と私に聞いた。私は「そうだよ」と答えたら、Aは先のように会った人に一人一人に挨拶をした。

この時期、A児は自分から他人に挨拶したり、声をかけたりなど自分から言葉でかかわろうとする場面が見られた。これはA児と母親の話を聞いた後、父親は挨拶をするのが大事なことと改めて認識し、自分から他人に挨拶をしはじめたことが結果としてA児に影響を与えていたのではないかと推察された。今後もこのエピソードのように挨拶などを通して、コミュニケーション手段の獲得ができるように支援する方向性が確認された。

⑤ 第五回カンファレンス概要（12月15日）

言葉の表出が増えてきており、3語文も話すようになってきた。さらに「～して」「～つけて」「～らない」といった動詞も使うようになってきたことが報告された。また、観察の報告では、A児が日本語の意味をかなり理解してきている姿が報告された。園でも友達が増えてきており、自分が使っているものを友達と共有する姿も見られるようになってきた。それがエピソード2-6である。

エピソード2-6 201X年12月中旬

A児は男児Dと一緒に手をつなぎ、山際を歩き来していた。保育者が「A、友達と一緒にいいね!」と声をかけた。するとA児は何度も頷きながら「D、ともだち、ともだち」と嬉しそうに返事をした。また、二人は木の棒を手にしており、それを武器に見立てていたようで、剣を持ったようなポーズを取って、顔を見合わせて笑った。

両親から、冬休みを利用して一時帰国をすることを聞いたが、年少児クラスの時とは異なり滞在日数が大幅に短くなった。このことから両親がA児の園生活を送る時間を大事にしようと、意識が変容してきたことが伺えた。滞在が終わり、日本に戻ってくる1月中旬、幼稚園では毎年コマや縄跳びなどの遊びが盛り上がっている。そこで、中国に帰国中に、コマ、縄跳び、カルタ遊びなどが経験できれば、日本に戻ってきた時に、A児も楽しめるのではないかと考え、両親に遊び方を伝えていった。

⑥第六回カンファレンス(2月9日)

エピソード2-7 201X年1月下旬

クラスの集いの際に、こおり鬼という鬼ごっこを取り入れていた。鬼からタッチされたら氷になって動けなくなるが、仲間がタッチしたらまた動けるようになるのがルールである。追いかけてこの楽しそうな雰囲気にはかかれてA児もやってみようとするが、タッチされてもそのまま動いてしまうので、他児から「動いたらダメ」と言われていた。何か言われたことを感じるのか、怒ってその場を離れることが続いていたが、次第にルールがあることに気づき、タッチされると動きを止めるようになった。そして周りには友達に「たすけてー」と言葉にして助けを求めると、タッチをして助けてくれることを理解した。そして鬼にタッチされると自分で動きを止めて、助けられたらまた逃げ回るようになった。

年少クラスの時には、友達と触れ合い遊びは楽しむが、ルールのある遊びになると分からないことから、参加するのではなく床に寝転がる姿が見られていた。しかし、年中クラスのこの時期になると、友達と遊ぶ楽しさをしっかりと感じており、一緒に楽しみたいという気持ちが生まれてきたのだろう。思うようにいかないことに対して、すぐに拗ねるような態度を見せて

いたA児が、こおり鬼の際は気持ちを切り替え、タッチされたことに対しても怒らないなど、自分の感情を抑制する姿も見られてきた。このことは大きな成長であろう。遊びの中でこのように気持ちを切り替えたり、見通しを持ったりできることで、次第に生活の中でも感情のコントロールができるようになるのではないかという意見が出された。

IV. 総合考察

以上を踏まえて、外国籍幼児のコミュニケーションを広げるための支援について以下のように分析した。外国籍幼児のコミュニケーションを広げるためには、以下の四点が有効であることが示唆された。

①遊びを通して幼児同士が通じ合える経験の重要性

A児が友達とのコミュニケーションを広げるきっかけとなったのは、初期は言語よりむしろ「楽しい」という気持ちの共有であったことが、本研究のエピソードからは多く示された。また保育者は、A児にも通じた内容を大事にして保育を行った。そのことで、結果としてA児は友達とルールを介した遊びも行うようになった。津守(1997)は、幼児は遊びを通して「存在感」「能動性」「相互性」「自我」を育てることを述べている。また、矢野(2006)は、遊びの本質は「溶解体験」であり、そこでは言葉がなくなり、周りの世界と溶け合い繋がり会うことを述べている。このように遊びは、言語を介さずとも周りをつなげることを可能にする。A児に対して保育者が遊びを中心としてコミュニケーションを取ろうとしたことは、外国籍幼児に対しても有効なアプローチであったと考えられる。

②双方の言葉を用いたアプローチの有効性

A児が心を開くきっかけになったのは、「尿尿」という自分の母語で話しかけられたことであつた。その後も「ありがとう」と日本語で言うだけでなく「謝謝」と中国語で伝えたり、保育中に取って中国語で数を数えたり、簡単な単語を母語で話しかけるなど、双方の言葉を用いてアプローチを行なった。そのことを通じてA児は、保育者に対してより信頼感や親しみを示すようになった。管田(2006a)は、保育者が自園の文化に園児や保護者を合わせようとするによる弊害を述べて、保育者が自国自園の文化に外国籍幼児を合わせようとするのみ

でなく、保育者の側から外国籍幼児に近づこうとする姿勢の大切さが述べられている。外国籍幼児が感じることが出来る一つの方法として、保育者が外国籍幼児の母語を用いてアプローチをすることは、その幼児が保育者に対して安心感や信頼感をもつことに有効であることが示唆された。

③保育者の意識変容の重要性

これまでの先行研究において、外国籍幼児が入園した際に、そのクラス集団活動への参加を保育者が求めてしまう傾向があることが菅田(2006a)によって指摘されている。保育者は、外国籍幼児の受け入れに関して、他の幼児と同じことをする形での適応をどうしても求めるといふものである。本研究の事例でも、保育者の方が周りの子どもたちよりもA児を過剰に意識していると考えられる場面が見られた。そのような際、保育者の意識の変容に有効であったのが、第三者も参加するカンファレンスの存在であった。高橋(2007)は、実践記録を「書いただけ」で終わらせないために、実践記録を用いたカンファレンスの有効性を述べている。そのことにより、自らの態度を振り返ることができ、結果として畠山(2015)の述べる「行為の中の省察」が可能となり、A児の捉えや接する姿勢が変化することが考えられる。そして保育者の変容、成長が、幼児の成長につながることを池田(2015)は指摘している。カンファレンスや省察を通じた保育者の意識の変容が接し方や支援の内容の変化を生み、結果としてA児の成長が促されたのであろう。このことから保育者が意識を変容することの重要性が示唆された。

④保護者と保育者の隙間を埋めることの必要性

A児の母親は、日本に留学して育児や家事全般を担うことになり、ストレスを抱えていた。そのような中、保育者は日本での保育のやり方を丁寧に伝えると共に、A児の母国の文化について尋ねて理解を示した。また、具体的なA児の成長を伝えることで園の教育について理解してもらえるようにしたり、両親を呼んで中国文化を紹介してもらおう機会をもったりした。そのことで、保護者と保育者の子育て観や保育についての考え方の隙間は埋まっていったと思われる。菅田(2006b)は、マイノリティの子ども保育の問題として、保育者側がマイノリティの保護者に対して、多くのことを「あたりまえ」として説明する必要性を感じていないことを指

摘している。同様に菅田(2006a)は、日本の保育士と外国籍保護者には意思疎通の困難性が存在していることを指摘し、両者の隙間を埋め、共通認識をどのように広げていくかということが、外国籍幼児の保育における課題であることと述べている。保育者が外国籍幼児のみでなく、外国籍保護者に対しても、自国自園の文化を押しつけるのではなく、両者の隙間を埋める努力をしていくことの必要性が示唆された。

V.今後の展望

二年間の園生活を通して、友達との関わりが広がってきて、生活面も落ち着いてきている。しかし4月からは年長児クラスに進級することで、園の最年長児としての役割を任されることが多くなる。また様々な行事への取り組みの中で、クラスの仲間と話し合ったり、意見を折り合わせたりするような場面も経験するだろう。少しずつ日本語での会話が可能になってきているので、本児らしさを生かしながらも、周りの友達と一緒に遊びや生活を創っていきけるようにするためのより具体的な支援方法の模索と確立が課題となるだろう。

引用(参考)文献

- 1) 菅田貴子(2006)「外国籍幼児の保育所への適応過程に関する研究—留学生家族の子ども事例から見えてくるもの—」『保育学研究』第44巻第2号, 104-113.
- 2) 菅田貴子(2006)「米国の保育にみえる文化的多様性の意義—マイノリティの子どもたちを中心に—」『広島大学院教育学研究科紀要』第三部第55号, 383-389.
- 3) 高橋早苗(2007)「反省的实践かとしての教育実践記録の意義と活用—実践的カンファレンスを通して—」『教育方法学研究』第33巻, 49-60.
- 4) 池田竜介(2015)「日常の保育実践における保育者の子ども理解の特質—保育者が子どもを解釈・意味づけする省察の分析を通じて—」『保育学研究』第53巻第2号, 116-126.
- 5) 畠中寛(2015)「保育実践場面における保育者の「行為の中の省察」—保育者の想起に基づいて—」『保育学研究』第53巻第2号, 127-137.
- 6) 津守真(1997)『保育者の地平』ミネルヴァ書房

7) 矢野智司 (2006) 『意味が躍動する生とは何か』 世織書房

要 約

多文化共生社会における外国籍幼児の支援に関する実践的研究
—コミュニケーションの広がりを目指した保育の構築—

本研究では、近年増加傾向にある外国籍幼児の支援に関する実践的研究を行った。外国籍の幼児は、母語しか話せない場合がほとんどであり、制度としても就学児のような手厚いサポートが受けられない。そのため、保育における意思疎通の難しさが問題となるため、コミュニケーションの広がりを目指した保育の構築を検討した。エピソード収集及びカンファレンスを行うことで対象児の変容と支援の内容を把握することを通して、外国籍幼児のコミュニケーションを広げるためには、以下の四点が有効であることが示唆された。①遊びを通して幼児同士が通じ合える経験の重要性、②双方の言葉を用いたアプローチの有効性、③保育者の意識変容の重要性、④保護者と保育者の隙間を埋めることの必要性。

The Practical Research of the Support for the Preschooler from Abroad
—To Construct Early Childhood Education for Promote Communication—

This study aimed to support the preschoolers from abroad. Most of them speak an only mother tongue. There is no institutional support for them. Accordingly the communication between the children from abroad and the children who speak Japanese faces many difficulties. This study examined what is important to improve their communication. Two caregivers have made documents describing the characteristics of subject's communication for two years and some caregivers in the kindergarten have held conferences in which they revealed the relationship between the supports which caregivers have done and the changes of subject's communication. The result shows that it is important that (1) caregivers speak a word in Japanese with a corresponding word in subject's language, (2) caregivers attempt not to adapt subject's behavior to the classroom culture but to attract his/her interest in the classroom activities, and (3) caregivers and subject's parents get to know each other.